

4回の南アフリカ・ケープタウン滞在

大野正夫



私は1975年、1996年、2001年と2022年の2月に南アフリカのケープタウンとその周辺地域に滞在した。ケープタウンは、アフリカ大陸の最南端で、1600年代の帆船による大航海時代からの寄港の町として発展した。

“ふじ”から望んだテーブルマウンテン。色が焼けているが、美しい緑と岩山で、船が浮かんでいた。

1975年3月に、南極地域で過ごし帰路、南極観測船、“ふじ”の艦上から、岩と雪しかない風景に慣れていた眼前に、緑色のテーブルマウンテンがだんだんと近くになってきた時には、何とも言えない感動があった。

1975年に第16次日本南極観測隊の夏隊員として、1月中旬から約4週間を、ヘリコプターで飛び、雪のない露岩地帯にテントで過ごした。天候が急変するのが南極で、長期間に露岩地帯でテントで過ごし、調査することは初めてのプランであった。移動のない野外調査で詳しいデータデーターを取るためであった。

夏と言ってもブリザードは来る。昼間は5℃くらいには上がるが、風が吹くとマイナス20℃に下がった。1度ブリザードになり、終日テントの中にいたこともあった。15次の越冬隊員との混成部隊であったので、テントの中で越冬中の話を聞いた。



こんな生活をしていたので、南極地域で過ごした帰路、南極観測船、“ふじ”の艦上から、岩と雪しかない風景に慣れていた眼前に、緑色のテーブルマウンテンがだんだんと近くになってきた時には、何とも言えない感動があった。帆船時代の航海者たちも、大西洋の荒波を超えてテーブル状の山を見た時に、安堵感と感動があったであろう

2022年には、宿泊したホテルのホールには右の絵画が掛けられていた。ケープタウン港内の最奥域で、昔からの港内遺跡が残り、古いホテルや倉庫群に囲まれた「ウオーターフロント」と呼ばれているところに宿泊した。帆船時代の航海者たちも、大西洋の荒波を超えてテーブル状の山を

見た時に、安堵感と感動があったであろう。その象徴の岬が希望峰・希望峰(Cape of good hope)である。希望峰を過ぎると、静穏はインド洋の海となる。

南アフリカ共和国の歴史

アフリカ南端の町、喜望峰があるケープタウンには良港があり、1652年にオランダ東インド会社が、喜望峰の周辺域を寄港基地として、航海上の重要な拠点とした。この地域の気候が、地中海沿岸に似ていることも大きな理由であった。この地域にオランダ人の移民が増加し、オランダ領東インドから農業労働者として連れてきたインドネシア系人とアフリカ系人の混血が進み“カラード”と呼ばれ、白人と差別された。

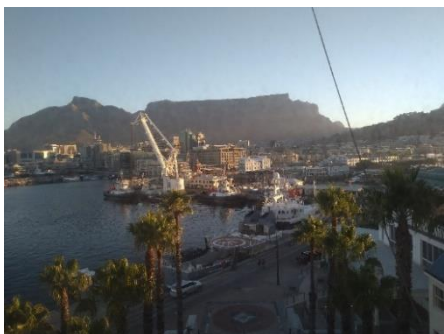
19世紀初頭にケープ地域植民地は、オランダからイギリスへ譲渡され、イギリス人が多数移住を始めた。ケープ地域、現在のケープ州はイギリスの植民地となり英語が公用語となりイギリスの文化や風習が強まった。1879年に、南アフリカ地域の民族間の内戦があり内陸部の諸民族は敗れて、現在の南アフリカ共和国の領地は、ほぼ完全にイギリスに支配された。1910年5月31日に、ケープ州、ナタール州、トランスヴァール州、オレンジ州の4州からなる南アフリカ連邦として統合された政府が樹立した。

1911年には、内陸部の鉱山労働者は白人と黒人間の職種区分をされて、白人労働者保護のための人種差別主義法である「鉱山・労働法」が制定された。この労働者人種差別法が継続された。第2次世界大戦が終結しアフリカ諸国に独立運動が活発になる1948年に白人との混血“アフリカーナー”や都市部の白人を基盤とする国民党が政権を取った。国民党は、労働、教育、生活・居住区まで広げた黒人隔離・アパルトヘイト政策(人種隔離政策)を推進していった。国際連合の抗議やアフリカ人民評議会などの団体の抵抗にもかかわらず、国民党はアパルトヘイト政策をやめることはなかった。南アフリカ連邦政府は1960年代から1990年にかけて、さらに強固なアパルトヘイト政策を取った。国内では人種平等を求める黒人系のアフリカ民族会議(ANC)による民族解放運動が進みゲリラ戦が行われた。日本人は白人でないにもかかわらず白人として扱われる名誉白人として認められ、日本は南アフリカ政府や南アフリカ企業と深いつながりを持つことになった。アフリカ諸国が独立国になっていった時代に、露骨な人種差別主義政策をとり続けたために、アフリカの新興独立国からも国際的にも孤立し1980年代には西側諸国から国際的経済制裁を受け、南アフリカ連邦の内外で反アパルトヘイト運動が高まった。

1993年にデ・クラーク大統領は、アパルトヘイト関連法の廃止、人種差別の全廃を決定する英断を下した。1994年4月に初の全人種参加の総選挙が実施され、アフリカ民族会議(ANC)が勝利し、ネルソン・マンデラ議長が南アフリカ共和国の初代大統領に就任した。アパルトヘイト廃止に伴い、イギリス連邦と国連に復帰し、アフリカ統一機構(OAU)に加盟した。マンデラ政権成立後、新しい憲法を作るため制憲議会が始まり、1996年には新憲法が採択された。現在は鉱山資源が豊富であり鉱工業が盛んで、農業生産も伸びて、先進国・中進国20か国連合に、アフリカで唯一の加盟国となっている。

しかし、アパルトヘイトが撤廃された現在になっても、人種間失業率格差が解消されないでいる理由は、アパルトヘイトの期間が長かったために教育水準の格差を大きい。黒人の失業が多いことが社会問題になっている。アパルトヘイト撤廃によって、雇用平等の権利を得ても、労働者層には教育水準に差があった。アパルトヘイト時代に教育を受ける機会を得られなかった黒人は、その後も鉱山労働者や日雇い雇用など不安定な業種にしか職を求めることができなかった。アパルトヘイト関連法撤廃後30年が経過し、白人と平等の教育を受けた世代の者が多くなったことで、白人・黒人間の失業率格差は縮小しつつある。また政府は機械・IT技術者の育成など技術労働者へ教育プログラムを推進している。国民の間の優和政策に努めている。しかし、なお都市部の犯罪率は高く、多くの過激派組織も活動している。

アパルトヘイト時代のケープタウン



ケープタウンには、毎回3月から4月に訪れた。この頃は、ケープタウンは真夏で過ごしやすい。

1975年3月は、日本南極地域観測隊16次隊の隊員として、南極からの帰路の寄港で1週間の滞在であった。35歳の時であった。ケープタウン周辺は、真夏でも日中25℃ほどで、湿度は低く、さわやかであった。サバンナ気候で灌木平原が広がっており、温暖差が少なく住みよいところである。

現在のケープタウン港

ケープ州は広大な農地があり、ワインの産地でブドウ畠であった。ケータウンにはヨーロッパ系白人が多く住み経済的にも繁栄していた。水産局に勤める海藻研究者達にお世話になり、海藻調査や家族のピクニックにも同行させてくれた。



左:所長家族とともに、バーベキュー(初めての体験)

広い自動車道で、良く整備されており驚いた。ケープ半島の東側は暖流が流れており温暖であり、西側は南極海からくる寒流が流れている荒海となっている。海藻は良く繁茂しており、打ち上げている海藻が多かった。

滞在中に街中も散策したが、黒人をみかけることは少なかった。黒人労働者は裏方の仕事をしていることが、だんだんと分かってきた。人種差別は厳しく、艦長からも街中で黒人との交流は厳禁されていた。

アパルトヘイト(人種差別)制度下で、白人と異色人とは、教育、職業、居住も別であったのである。日本人は名誉白人であり、中国人や韓国人は異色人であった。我々の入るレストランには白人と日本人だけであった。当時はマグロ船の寄港が多くて、かなりの日本人をレストランで見かけた。レストラン内で、大声で話す漁船乗組員の態度が気になった記憶がある。バスは英国式 2 階作りであり、白人は 2 階席であった。友達とバスに乗った。階段が面倒で 1 階席の車内に入ろうとしたら、運転手は 2 階を指さした。逆らうこともないので、2 階への階段を上った。

レストランでマグロ船乗組員と話したことがあった。彼の話では、韓国のマグロ船も多く入港しており、彼らは白人系のレストランやホテルに入れず不満を持っており、日本人乗組員に罵声を掛けるなどの嫌がらせをずっと言っていた。日本人だけが、白人系のレストランやバスの 2 階席に座ることは、あまり良い気持ちにはなれなかった。

アパルトヘイト廃止後

1997 年にケープタウン郊外で国際ワークショップがあった。米国人やヨーロッパ人には、ケープタウンは気候が良く好まれ、会議施設も整っており、国際会議が多く開催されていた。アパルトヘイト制度がなくなって4年後で、空港の入国審査官は全員アフリカ人であり、空港内の係員の多くがアフリカ人であることを異様に感じた。「公務員はアフリカ人を多く採用することになった」と知人が言った。しかしホテルのフロントマンは、白人であり、宿泊者にはアフリカ人はみかけなかった。私達が入るレストランでもアフリカ人は見かけなかった。20 年ほど前とあまり変わっていないと感じた。30 年と長く続いた人種差別制度の廃止であるので、急激な変化は起きていないと推察したが、アフリカ人は英語がうまく話せない者が多いことを後で知った。



しかし、国際会議は、政府の配慮か、アフリカ人が参加していた。多分南アフリカの研究者ではないと思ったが、参加者と気さくに話していた。写真にも、にこやかで応じてくれた

2001年に、再び国際シンポジウムがあった。この時には、フロントやレストランのウエイトレスは、まだ白人であった。ホテル内のロビーで、ソファに座っているアフリカ人を見かけるようになった。しかし何となく、彼等が遠慮しているような感じを受けた。

ケープタウンには、多くの国から観光客が来ているが、アフリカ人と思われる旅行者は見かけることはほとんどなかった。



シンポジウムは、テーブルマウンテンの麓にあるケープタウン大学であったので、我々はウォーターフロントのレストランで、毎日、日本人グループで夕食を取った。レストランは観光客でにぎわっていた。

ウエイターはアフリカ人であったが、観光着のアフリカ人と思われる客は見かけなかった。

2022年2月に、国連の貧困対策のために海藻養殖開発を提案する案件でケープタウンに、長男と二人で訪れた。ウォーターフロントの古くからあるホテルに泊まり、港町を散策した。コロナ禍でヨーロッパ人旅行者は少ないこともあるが、写真に示すように街中の広場の階段にはアフリカ人の若者が占領していた。



広場ではそれぞれの民族衣装で歌うショウが開催されており、多様なアフリカ人種が集まるところになっていた。レストラン内もアフリカ人家族が多かった。知人は、「現在、アフリカ人実業家が育ちつつあり、アフリカ人中産階級層が増えている。レストランで食事をしている者の多くは、中産階級と言われる人々である」と説明した。

ウォーターフロントレストランに広場でくつろぐアフリカ人の若者たち

しかし、この国の失業者が50%という実情もある。この国の主要産業であり外貨を得ているのは鉱山産業である。近年、中国のこの分野の台頭が著しく鉱山産業が不況になり、鉱山労働者の多くが都市部に流入して失業者になる。

この国を変えてゆくには、多くの人種が優和して新たな産業を起こして、多くの職場を作ることである。南アフリカの公用語は英語のほかに、アフリカーンス語、ズールー語のほかに8つの公用語がある。多民族国家である。部族国家とも言える。

南アフリカの産業の振興策

南アフリカで、治安が悪いのは大都市の一部であり、地方の治安は良い。ケープタウンを中核として、治安のよいケープ州に多くの産業を起こし、中産階級層を増やしてゆき、内陸部へと産業が波及することが、一つの方法かもしれない。今までは内部地区の鉱物資源に頼った国造りで、過酷な作業にアフリカ人の労働力が必要であった。鉱物産業の衰退が、多くのアフリカ人の就労場所をなくし、彼等は都市部に移動し貧困地区を作った。2001年の訪れた時に、これらの地区が、粗末はトタン屋根の家であったが、今回、上空からみた

光景は、スレート屋根になっており、きちんと区画整理された道になっていた。現在の南アフリカ共和国政府の施策を評価はすることは難しいが、南アフリカ政府は、貧困対策には力を注いでいることは確かである。



貧困対策に海藻養殖を選択したことは、国策として大きく舵を切ったと思う。陸続のナミビアで水産局の主催の国際ワークショップがあり、海藻部門で参加したことがある。砂漠の国で、以前はダイヤモンドの産出国であった。現在は、まぐろ、エビ、アワビなどの水産物が主要産業になっており、小さな国であるが、空港には大型貨物ジェット機が置かれていた。生鮮水産物を定期的にヨーロッパに空輸していると聞かされた。ケープ州沿岸海域は魚介類の宝庫である。しかし南アフリカ政府は水産物産業を振興しようとする機運がまだ乏しい。

岸壁まで繁茂する大型褐藻のジャイアントケルプ

ケープ州には多くの湾があるが、養殖・漁港として認められてるいは、二つの湾だけであることを知った。今回、養殖が認められている湾

で、オゴノリ(寒天の原料)養殖試験を始めることになった。